

空中回廊

AICHI PREFECTURAL MUSEUM OF ART 愛知県美術館友の会 会報

MEMBERSHIP 第19号



愛知県美術館友の会 発足10周年記念企画 これまでの10年 これからの10年

ごあいさつ

愛知県美術館友の会は今年発足10周年を迎えました。美術を愛好する人たちの集まりというだけで、初期には具体的活動には及びませんでした。10年を経て友の会は活発に動き出しました。会員一人ひとりの美術を愛好する熱意と、美術館の皆さんのご協力あってのことと思います。

これから美術館の持つ役割は非常に大きくなることでしょう。友の会も次の10年に向けて、大きな一歩を踏み出す年にしたいと思っています。

愛知県美術館友の会会長 宮崎玲子

鼎談 — 美術館友の会の新しい姿とは

発足から10年を迎えた愛知県美術館友の会。今年は数字だけでなく、実際の活動内容でも節目の年となります。そのあたりを市川館長、友の会担当の木本企画普及課長を交え、宮崎会長と3人で語り合っていました。

最近「友の会による美術館のサポート事業」という言葉をよく耳にするようになりました。これはどのようなものなのでしょうか。

宮崎 「美術館支援」はこれまでも友の会事業の大きな柱でしたが、企画展の広報活動などごく限られたものに留まっていました。友の会の中には、ただ美術館に来て作品を鑑賞したり講座に参加したりするだけではなく



左から市川館長、宮崎会長、木本企画普及課長

て、もっと積極的に美術館と関わりを持っていきたいという意見が前々からありましたが、なかなか具体化しませんでした。今年は友の会が誕生してちょうど10年にあたりますから、これを機に美術館を支援する事業に本腰を入れて取り組んでいきたいと考えています。

サポートとは、具体的にはどのようなことをするのでしょうか。

宮崎 これについては現在協議しているところですが、一言でいうと、私たちにできて美術館にも喜んでいただけること、ですね。会員の皆さんは、美術を愛好する者であると同時に様々な特技を持っていらっしゃいます。それを生かすことが美術館支援に繋がると考えています。

例えば、友の会ホームページはもとより美術館ホームページも制作するとか、保存・展示に必要な小物を製作するといったことがあげられます。また、美術館広報物のモニターとなり、美術館発行のポスターやチラシを、専門家ではないけれども美術が好きな素人の目から見てどう感じるかを伝えることもできます。それから、美術館が行ったアンケートを集計したり、広報物の発送のお手伝いをしたりといったこともあります。他には、年度末に小中学生の団体がたくさん来館して学芸員も大変お忙しくなると伺っていますから、代わりにそのガイドができないだろうかと考えています。これについてはいきなり行うことはできませんので、何回か講習を受けトレーニングした上で、ということになります。

例えば小中学生を相手にガイドをするといった、専門性が問われる事業に友の会が参加することに対して、美術館側として不安はないのでしょうか。

木本 いま宮崎会長がいろいろとおっしゃった中から、できること、手がつけられることから美術館と友の会で一緒にやっという話になっていて、美術館にとってもありがたいことです。

私たちは新しい美術館になって12年目になりますが、開館当時と較べると、社会が美術館・博物館に求めるクオリティーが高くなってきました。例えばホームページをとってみても、98年の開設当初は約9千件/年だった

■「欄外のひとこと」 今回は川柳。お題は友の会と美術館。
10周年記念号のアンケートの応募作品から13点をご紹介します。

平成4年度

10月 愛知芸術文化センター愛知県美術館開館

平成6年度

9月 設立発起人会開催 photo01

◇滑走期◇

10月 愛知県美術館友の会発足

理事会発足 初代会長は井関弘太郎さん

鑑 特別鑑賞会開催開始

鑑 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催（年度3回）

3月 発 友の会会報創刊号発行

担当学芸員と会員有志で原稿作成開始
会報名を募集し『空中回廊』に決定

平成7年度

鑑 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催（年度6回）

11月 発 『空中回廊』第2号 photo02

3月 イ 懇親会



平成9年度

鑑 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催（年度6回）

6月 イ 懇親会 photo03

10月 発 『空中回廊』第5号

2月 発 『空中回廊』第6号



平成10年度

鑑 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催（年度7回）

7月 イ 懇親会

1月 発 『空中回廊』第7号

3月 発 『空中回廊』第8号

3月 イ ロビーコンサート（チェンバロ演奏）
「ブッサンとラファエッロ展」によせて

平成8年度

9月 鑑 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催（年度5回）

12月 発 『空中回廊』第3号

1月 イ 懇親会

3月 講 講演会「高橋由一《不忍池》一幕末から明治へ」
（浅野徹館長）

発 『空中回廊』第4号

平成11年度

鑑 企画展に

12月 発 『空中回廊』

2月 発 『空中回廊』

アクセス件数が、最近では約6万件／月まで増加して、県庁内の部署でも1、2位を争うまでとなっています。これだけ需要は高まったのに、更新は遅れている。この情報化時代に最新の情報を提供していかないと、お客様にアクセスしていただけない。では美術館のスタッフだけでそれができるかと言えば、現実的には無理があります。それではどうしようかという話をしていたときに、友の会から「そういうことを得意とする方もいますのでいつでもご協力できますよ。」という話をもらったわけです。そうやって我々に足りない部分を補ってもらおうということです。

市川 広報については、企画展の情報もありますが、その前に愛知県美術館がどのような活動をしているかを

知ってもらう必要があると考えています。今までは、美術館の存在を受けとめてもらうための取り組みが弱かったと思います。美術館はあるイメージを持たれていなくてはならないと考えています。そして、あるイメージが持たれた時に、はじめて美術館が社会に対して存在していることになると思います。

宮崎 いま館長がおっしゃったような、愛知県美術館のイメージをどう創っていくか、というところですが、これに友の会がどのように関わるとお考えですか。

市川 文化の豊かさというのは、間にどれだけ多くの人やことばが関わっているかということでもあると思うのです。例えば何か古いものが今ここにあって、それが価値を認められているとします。それは、いろんな人が関

平成12年度

- 4月 **鑑** 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催（年度5回）
- 4月 **イ** ロビーコンサート“バロック音楽とオランダ・ビールの夕べ”
「レンブラント、フェルメールとその時代展」によせて（5月にも開催）

陸期◇

- 友の会自主運営開始
- 7月 **友の会事務局の専任職員配置** 初代事務局長は平野孝雄さん
事務処理・業務管理を事務局へ移管
総会・特別鑑賞会なども友の会会員で運営
- 7月 **発** 『空中回廊』の企画・制作全工程を会員編集スタッフにて運営開始
- 7月 **総会での図録割引販売開始**
- 8月 **講** 講演会「加納光於―その航跡に沿って」
（馬場駿吉氏／友の会理事・美術評論家）
- 8月 **発** 『事務局だより』創刊
（以降企画展ごとに発行）
- 11月 **発** 『空中回廊』第11号
- 2月 **イ** 懇親会
- 3月 **発** 『空中回廊』第12号
- 3月 **支** 美術作品寄贈積立開始

平成13年度

- 鑑** 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催（年度5回・昼夜2部で1回とする）
- 6月 **鑑** 特別鑑賞会の昼夜2部制開始 「ロダンと日本展」より
- 7月 **会長・理事の大幅改選** 2代目会長は宮崎玲子さん
- 7月 **事務局長交代** 2代目事務局長は真野良子さん
会員向けサービスの拡大・美術館支援強化について議論開始
- 9月 **発** 『空中回廊』第13号
- 11月 **イ** 懇親会
- 1月 **講** 講演会「視線の森」（戸谷成雄氏／彫刻家）
- 2月 **イ** ロビーコンサート“弦楽四重奏の夕べ”「世界遺産・ポンペイ展」によせて
- 3月 **発** 『空中回廊』第14号
- 3月 **講** 美術講座の定期開催開始
- 3月 **講** 講座「ゴヤ・その独創性とは何かを一緒に考えよう」（雪山行二副館長）
- 3月 **支** 美術作品寄贈開始 森岡完介氏作品3点 photo 05 県からの感謝状受贈

に合わせ特別鑑賞会を開催（年度5回） photo04

廊』第9号

廊』第10号



平成14年度

- 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催
- 6月 **鑑** 講座「美術館って何ですか？」
- 7月 **講** 韓国古典舞踊鑑賞会
- 9月 **イ** 『空中回廊』第15号
- 10月 **発** 講座「美術館って何ですか？」
- 10月 **講** 懇親会
- 12月 **イ** 講座「現代美術の楽しみ方」
- 3月 **講** 『空中回廊』第16号
- 3月 **発** 講演会「熊谷守一に学ぶ」
- 3月 **講** 講座「ブロンズの語り」
- 3月 **講** 美術作品寄贈 磯見 隆
- 3月 **支** オアシス21からの感謝状受贈



わって、あるいは人から人の手に渡って、それで今ここにある。それが文化の厚みだと思うのです。作品について、誰も何も言わなかったら、それは優れた作品にはならない。作品についていろいろな人がいろいろなことを言う。そうやって語られてきたことでその作品は歴史的なものになってきたわけです。

美術館と、それを享受する社会・人々、この間で関わっている人が多ければ、それだけいろんなニュアンス、あるいは顔というものを持っていることになると思うんです。美術館員がいつも決まったコメントをしている、そこへ別の人が間に入って語ってくれば、また別の何かが伝わるわけです。そのことで語る事が変わっていく可能性があるのですが、変わってはいけないう

な絶対的なものはないと思います。むしろ、いろいろな人がいろいろなことを言うことで意味があると思うのです。だから友の会の方が広報的な役割を果たしてくれれば、それでこそ伝わる「何か」があるわけですよ。いろいろな人がいろいろな仕方に関わることで初めて、文化の厚みはできてくるのだらうと思います。

最後に、宮崎会長にお伺いします。今年で美術館友の会が発足して10年が経ちましたが、今から10年後の友の会は、どのようになっているのでしょうか。予想なり夢物語なり、語っていただけますか。

宮崎 前から考えているのですが、今ある受付とは別に、友の会インフォメーションがあればいいな、と思ってい

鑑賞会を開催（年度5回）
「？」（高橋秀治主任学芸員）
「韓国の色と光展」によせて
「？」2」（村田真宏美術課長）

対話法」（馬場駿吉氏／友の会理事・美術評論家）

について」（古川秀昭氏／岐阜県立美術館学芸員 美術館と共催）

」（長谷川三郎館長）

輝夫氏作品2点

地下連絡通路に友の会ポスター掲示 photo06



平成16年度

鑑 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催（年度5回予定）

5月 10周年記念特別企画

講 講座「美術館を知ろう」バックヤードツアー（村田真宏美術課長）

◇飛躍期◇ 6月 美術館支援活動の強化

7月 支 美術館サポート活動開始（総会にて決定）

講 講座「梅原龍三郎《横臥裸婦》」（浅野徹氏／名古屋芸術大学教授）

9月 支 企画展広報宣伝ステッカー協力 「クニヨシヤスオ展」で実施

10月 発 『空中回廊』第19号（10周年記念号）

友の会10周年

平成15年度

鑑 企画展に合わせ特別鑑賞会を開催（年度6回）

5月 鑑 託児付特別鑑賞会開始（昼の部で実施）「菱田春草展」より開始

6月 イ ロビーコンサート“日本の歌曲と朗読”「菱田春草展によせて」

6月 講 講座「感性のこと」（市川政憲館長）

8月 講 講座「不忍池をめぐる」（牧野研一郎副館長）

9月 発 『空中回廊』第17号 発行直後に在庫切れとなる大好評！

10月 イ 懇親会

12月 講 講座「仏像の光背について」（山崎隆之氏／愛知県立芸術大学教授）

2月 イ ロビーコンサート“弦楽四重奏”「中村彝展」によせて photo07

3月 発 『空中回廊』第18号

3月 講 講座「自作を語る」（吉岡弘昭氏／版画家）

3月 支 美術作品寄贈 吉岡弘昭氏作品4点

（水野）

ます。そこで、友の会のことなら何でも聞いてください、美術館のこともある程度ご説明できますよ、ってやれますよね。一般のお客様でも、何か分からないことがあれば、聞きにきていただければいいと思います。友の会の方はみんな美術が好きですし、企画展のことも一般の方より分かるはずですよ、特別鑑賞会もありますから。

それから、友の会コーナーが是非欲しいと思います。会員が集まる場所があれば、友の会活動や美術館支援活動の打合せ・作業もそこでできますし、会員同士のコミュニケーションもとりますよくなります。

木本 個人的な意見としては、美術館のロビーにそうした友の会インフォメーションのようなスペースがあればいいなと思います。ただ、それを実現のものとするには、

現在の受付との調整や、行政上の了解手続きなど様々な問題を処理しなければなりません。少し時間がかかると思います。

市川 そのためにはもっと友の会が制度として確立されて、美術館にとっても必要不可欠なものだと認知されないとはいけませんね。

宮崎 会員の皆さんが「友の会に入っていて良かった」と思えるような企画をこれからもして行きたいと思います。また、美術館をサポートする事業の今後のいっそうの活性化を願っています。

本日はお忙しい中ありがとうございました。

（聞き手 森）

ただいま準備中…

木村定三コレクションによる 熊谷守一展

開催期間 2004年10月8日(金)～12月5日(日)
友の会特別鑑賞会 10月14日(木) 昼・夜

愛知県美術館ではこの秋、木村定三コレクションによる熊谷守一展が開催されます。担当されている古田学芸員に、この企画展が開かれることになったいきさつや見どころについて伺いました。

木村定三氏はこの地方の美術収集家で、ご自身のコレクションから2001年度に11点、2002年度には333点を愛知県美術館に寄贈されました。木村氏は昨年1月、残念ながら逝去されましたが、故人の遺志を継いだ美保子夫人によってコレクションの残り2920点が愛知県美術館に寄贈されました。これにより木村定三コレクションは合計で3264点になりました。これらの作品は、展示する前に美術館で調査する必要がありますが、なにしろ数が多いので、調査し終えるのに3年くらいかかるそうです。でも、多数の素晴らしい作品が寄贈されたのに、調査が終わるまで3年も待ってはられません。そこで、調査が済んだものから順次公開される予定になっています。今回ご紹介する熊谷守一展はその第一弾というわけです。

木村定三氏が熊谷守一と知り合ったのは、1938年に名古屋の丸善で開かれた個展の時で、その際木村氏は、写真の《蒲公英に蝦蟇》と《蝦蟇に蟻》の2点を入手したそうです。2点はそれぞれ、「法悦感」、「厳粛感」という、木村氏独特の芸術観でとらえることのできる代表作です。タンポポの香りに鼻を寄せるガマの表情はまさに「法悦感」で、ほかに《眠り猫》などがこの部類に

属します。《蝦蟇に蟻》や《たまご》など、「厳粛感」のある作品の画面には、一種の緊張感がみなぎっています。

木村氏は熊谷守一と親しくなり、熊谷守一が亡くなるまでパトロンとなって作品の収集を続けました。内容も油彩、日本画、書、彫刻など多岐にわたっています。

今回の展覧会では、これらのコレクションの中から、約200点もが展示されます（期間中一部展示替えあり）。企画展に展示される作品数が100点を超えることは少ないとのことですから、今回がいかに多いかが分かります。しかも展示する作品を、木村氏から寄贈された愛知県美術館の所蔵品だけでほとんど全て賄ってしまうのですから、すばらしいことです。二人の親交と木村氏の厚意に感謝しなければいけません。

晩年の熊谷守一は、東京の自宅からほとんど出ることがなく、草木が伸び放題の自宅の庭で、植物や虫の観察をしてそれを絵に描くという生活を送っていました。そんな中、アリを観察していて、アリがどの脚から歩き始めるかを発見した熊谷守一は、これをうれしそうに木村氏に語ったといいます。パトロンであった木村氏も、熊谷守一の観察眼に驚いたそうです。また熊谷守一は、絵画や書などの一般的な作品のほかに、木村氏のためだけの「作品」も残しました。例えば、木村氏が収集した美術品の木箱の蓋に箱書きをしたり、あるいは木村氏の自宅の建具に絵を描いたり、といったものです。この木村邸の元調度品も、今回展示されることになっています。

今回の熊谷守一展の注目点は何と言っても、これまで「個人蔵」ということでほとんど人目に触れることがなかった作品がまとめて公開されるということでしょう。2002年度と翌年度に寄贈された一部の作品を除けば、木村定三コレクションの熊谷守一作品が美術館でまとめて展示されるのは世界初ということになるのですから。

「熊谷守一といえばやっぱり法悦感の《蒲公英に蝦蟇》だね。」「いやいや厳粛感の《たまご》でしょう。」と熊谷守一通を自慢しあっているそこのあなたたち、この熊谷守一展を見ずして熊谷守一を語ること勿れ！（森）



《蒲公英に蝦蟇》

みんなで選んだ 所蔵作品ベスト10

友の会10周年記念企画『みんなで選ぼう！愛知県美術館所蔵作品ベスト10』の集計結果をここで発表します。友の会会員とともに一般来館者にも参加して頂きました。

あなたの選んだ作品はありましたか？★印の作品は、「熊谷守一展」の期間中、展示して頂けることになりました。是非所蔵作品展にも足をのばしてください。それ以外の作品も、今後の企画展や所蔵作品展で順次展示されます。

《白猫》

熊谷守一

猫の毛並みを表現した筆跡がおもしろい



《青い肩かけの女》

パブロ・ピカソ

「青の時代」の作品

《桜蘭の遺跡・昼》

平山郁夫

シルクロードを日本画で表現した



《こだま

(あるいは「街路の神秘」)》

ポール・デルヴォー

神秘的な若い女はギリシャ神話の妖精「こだま」の分身

第1位 《人生は戦いなり(黄金の騎士)》(1903年)

グスタフ・クリムト (オーストリア出身)

新しい芸術の旗手として、闘うクリムト自身の姿を見ような作品です。

第2位 《白猫》(1962年)★

熊谷守一 (岐阜県出身)

第3位 《青い肩かけの女》(1902年)

パブロ・ピカソ (スペイン出身)

第4位 《桜蘭の遺跡・昼》(1990年)★

平山郁夫 (広島県出身)

第5位 《こだま(あるいは「街路の神秘」)》(1943年)

ポール・デルヴォー (ベルギー出身)

第6位 《大曽根風景》(1919年)★

大沢鉦一郎 (愛知県名古屋出身)

第7位 重要文化財《富嶽烈松図》(江戸時代)

与謝蕪村 (摂津国(現大阪市)出身)

第8位 《線路に面した家》(1955年)★

荻須高德 (愛知県中島郡井長谷村(現稲沢市)出身)

第9位 《絵画》(1925年)★

ジョアン・ミロ (スペイン出身)

第10位 《消失に向かう地点の青》(1958年)★

サム・フランシス (アメリカ出身)

この結果に対して所蔵作品展示担当の村田美術課長にコメントをいただきました。

所蔵作品ベスト10は、なかなか味わい深いラインナップになりました。クリムトをはじめとする西洋美術は、偽証から中小までが時代的な広がりを持って選ばれています。日本美術も与謝蕪村から平山郁夫までが押さえられ、その中でも愛知県出身者の作品が2点、また木村定三コレクションからも2点選ばれています。そして西洋と日本のものが各5点ずつ。何とも絶妙なバランスであり、またそれは当館のコレクションの性格をよく反映してもいます。ちょっと残念なのは、彫刻や現代美術からの選出がなかったことです。(村田美術課長)

あっちこっち友の会活動紹介

最近では友の会をもつ美術館が多くなりましたが、活動の内容はさまざまです。愛知県美術館の友の会活動が転換期を迎える今、そのあり方を考える上で参考になるかと、2つの美術館の友の会を紹介します。

そこには別の世界がある

メトロポリタン美術館友の会（米・ニューヨーク）

世界屈指の美術館であるメトロポリタン美術館（以下MET）にも友の会があります。下は年会費45ドルの学生会員から上は20,000ドルのプレジデントサークルまで15のカテゴリーがあります。会員になることのメリットは、入場料が無料になること、会報や情報誌が送られてくると、ミュージアムショップで割引が受けられることなど日本の友の会でも一般的なものもありますが、METらしい特典としては、館内にセントラルパークを見下ろすことのできる会員専用のレストランとラウンジがあるということです。両方とも豪華な室内ですが、特にラウンジはアンティークの家具の置かれた特別にすてきな空間です。しかし、会員カテゴリーによって利用条件に大きな差がつけられています。普通の会員（年会費50ドル）が利用できるのはレストランのみで、しかも夏の間の金、土曜日のディナー、土曜日のランチ、日曜日のランチの時に年間に一度だけです。プレジデントサークルになるとレストランとラウンジの両方がいつでも何度でも利用できます。ラウンジにはどんな人たちが集まっているのか一度覗いてみたい気がしますね。

プレジデントサークルの特典は他にもあります。美術館でのディナー、ダンスパーティ、ガーデンパーティや収蔵品の楽器を使ったコンサートへの招待、すべての人に先駆けて展覧会を鑑賞したりオープングレセプションへ招待されたりもします。なかでも特別なのは館長の自宅で開かれるプライベートなレセプションへの招待、さらに学芸員に希望する内容のレクチャーをラウンジで



メトロポリタン美術館 ザ・パトロンズ・ラウンジ

お茶を飲みながら個人的に受けることまでも可能なのです。

プレジデントサークルの会員になる人にとっては、会員になることが美術館への貢献であるとともに社会的ステータスであり、美術館側にとっては1つの重要なビジネスでもあるようです。友の会の存在がビジネスとして捉えられるということが実にアメリカ的に思えます。このような活動がMETを世界的な美術館として支えていく上で必要なことなのでしょう。

すべてがボランティアによって運営されている

広島県立美術館友の会

日本の美術館の友の会は、年会費を払えば展覧会が無料になりますというメリットが強調されるところがほとんどです。中には独自の講座や美術鑑賞旅行を目玉にしているところもありますが、広島県立美術館の友の会はボランティア活動をメインにした稀な友の会です。

平成8年に美術館がリニューアルオープンしたのを機にそれまでの友の会を解散し、ボランティアによる新しい会が組織されました。現在の会員数は約1000人です。専任のスタッフを置かず、すべての運営が会員によるボランティアの手で行われていますが、すべての会員が何らかのボランティア活動に携わっているというわけではなく、中には遠方に住んでいるなどの理由で活動に参加できない会員もいます。

活動は7つのグループからなります。総務グループはすべての業務を統括し、会費の徴収や会員証の発行から会計処理まで取り仕切っています。企画グループは友の会が主催する講演会や上映会（美術館との共催も多い）、美術鑑賞旅行の企画と運営をしています。日帰りや2、3泊の旅行が年に4、5回あり、さらに海外旅行もあります。編集グループは『色絵馬』という会報を編集して年4回発行しています。カラー写真がふんだんに使われ、所蔵品の解説や企画展の紹介とならんで友の会の活動報告も写真入りで大きく取り上げられています。カラー写真の多いところは『空中回廊』でも見習いたいところです。ギャラリーガイドグループは二十数名の会員によって所蔵品展の解説を毎日実施しています。ほかにも講演

会の受付や郵便物の発送業務を美術館の要請のあるときに行うサポートグループ、学芸課に届いた図録などを書庫に収納する資料整理グループ、友の会のホームページを作成・管理しているグループもあります。

美術という共通の趣味をもつ人たちが一致協力して運営している友の会では会員同士の交流もすすみ、活発な活動がされているようです。このような友の会には、美術を楽しむこと以外にもいろいろな楽しみがあるように思いました。

みなさんはどちらの友の会により魅力を感じましたか？
(折戸)

答えてうれしい！プレゼントクイズ

友の会10周年を記念して、愛知県美術館と友の会に関するプレゼントクイズを実施します。全問正解者の中から抽選で、2つのコースから選べるプレゼントが当たります。問題の正解は次号に掲載します。

Aコース 企画展オープニングセレモニーご招待 5組

友の会会員の方に限ります。特別会員の方には、別のプレゼントをご用意します。次回企画展「山水から風景へ」展（2005年3月10日 15：00～）へのご招待となります。

Bコース 愛知県美術館アートグッズ 20名

応募方法

希望コース・会員番号（会員のみ）・住所・氏名・クイズの全ての答えをご記入の上、友の会事務局宛にハガキ・FAX・E-mailのいずれかでご応募ください。宛先は裏表紙をご覧ください。

応募期限

2004年10月31日（日）必着

当選発表・プレゼントの引き渡し

次号事務局だよりで発表と共に、ご本人にもお知らせします。各コース共に美術館受付にてお渡しします。

第1問 愛知県出身の作家はだれ？

- A. 前田青邨 B. 安田靉彦 C. 川合玉堂

第2問 企画展（個展）で扱ったことのある作家はだれ？

- A. 黒田清輝 B. ピカソ C. ロダン

第3問 12階の屋外展示スペースに展示されている作品はどれ？

- A. 舟越保武《花を持つ少女》
B. ジッドマン《カリブの女》
C. 戸谷成雄《地霊》

第4問 移動美術館が開催されたことのない場所はどこ？

- A. 小牧市 B. 海部郡立田村 C. 蒲郡市

第5問 友の会寄贈作品の作家でないのはだれ？

- A. 吉岡弘昭 B. 藤井達吉 C. 磯見輝夫

第6問 会報『空中回廊』の表紙になったことのある作品はどれ？

- A. コルヴィッツ《恋人たちⅡ》
B. プールデル《両手のベーターヴェン》
C. コールダー《片膝について》

会員のたより

10周年記念号のために、会報アンケートを通して会員のみさんから「ひとこと」を寄せていただきました。

初めに友の会恒例の特別鑑賞会、講座についての「ひとこと」を紹介します。

■今までは作品を理解することなく素通りで鑑賞していましたが、友の会に入会し学芸員の皆様に説明して



いただき、とてもわかりやすく理解できました。ありがとうございます。

■作家との会話、学芸員による会場内での解説があり、より作品に近づく場である。

■所蔵品展の鑑賞会が開かれるとよいです。学芸員のお話を聞くことで新しい発見があるかも。

■友の会に入会するきっかけの一つでもありましたギャラリートークに初めて参加したときの感激は忘れられません。本当にぜいたくな時間をいただきました。

■心地よい椅子にこしかけての特別講座、公開講座はなにより学べて有難いので今後も充実してほしいものです。



次は定員オーバーの人気だったバックヤードツアーに関するものです。

■バックヤードツアーは友の会会員にとりまして最高のプレゼントでした。作品が整然と収蔵されている中で未整理の木村コレクションの茶碗類が色とりどりの風呂敷に包まれひしめいている光景に感慨一入でした。

■バックヤードツアーに参加して、友の会に入会しているから可能なことだと喜んでいますが。企画展毎の特別鑑賞会や講演会にも都合がつけば毎回参加しています。



そのほか、友の会の魅力、役割というのはいろいろあるのだということを教えていただいた「ひとこと」です。

■良い作品に出会い、感性を磨ければと思います。

■今、介護（姑と母）の真っ最中、長引く介護の日々にほんのちょっと時間を見つけて名画でなくても絵を見ることは本当に生きかえる気分です。

■「韓国の色と光」展の折、韓国の宮廷舞踊を見せていただきました。単に絵画や展示物だけでなく、舞踊を通して韓国に触れた思いがしました。友の会だからこそ美術が幅広く楽しめます。



大野三郎さんは「だから、私は“美術館”友の会の会員」という一文を寄せてくださいました。

私は美術館が好きです。何で今さら、と思われるかもしれませんが、でも、私は「美術館」が好きなのです、「美術」が好きなわけではありません、もっとも、キライではありませんが。

私はよく美術館に出かけます、どうしてか。ハヤリのことばで言えば、美術館が「癒しの空間」だからでしょう。私は「癒しが必要なほどの過酷な生活」を送っているわけではありませんけどね。どちらかという、ナマケモノに分類される私は、時々中途半端に時間が余ってしまうことがあるのです。「お金を払うことは、払わせるヒト・モノに対する思想的な屈服である。」と信じている（世間では、こういうヒトを、けちといますが）私は、その時間の消費のために使う費用を惜しむのです。そんなときには、自転車に乗って都心をお散歩？しがてら、「美術館」に寄ります。

帽子とバッグをロッカーに預けて。「特別展」の会場には行きませんが、ロビーをすこしブラブラしてから「常設展示室」に行きます。展示室はいつも閑散としていて、たいていは、監視のお嬢さんたちだけです。長年会員でいると、展示されている作品もお馴染みさんばかりです。新しく展示された作品とか、久しぶりに出てきた作品を見るのも楽しみです。今回、かなり展示位置が入れ替えられていました。定かではありませんが、私が会員になってからは、大幅な展示替えはなかったように思います。それで、とても新鮮に感じました。展示位置によって受ける印象が随分ちがいますね。クリムトは[特別席]から[入口一般席]に代わって、「気楽になったな～」と言っているようです。デルヴォーは大きさが一回り小さくなったように見えます。バックヤードツアーで、展示中の作品は「お仕事」なのだ、と知った私は、心の中で「ご苦労さま」を言ってあげます。

天井は高いし、床は底がすこし硬い靴だとコツコツといい音がします。うるさくならない程度の音をたててリズムを保ちながら作品の前を歩き、気に入った作品の前

で靴音をとめます。「こんな気分は大金を積んでも買えないだろうな～」と、いつもこのとき考えます。こ



んな環境を維持していくためには、費用もさることながら、職員・関係者の皆様のご苦労は、表に現れない分大変なんでしょうね。つまり、会費は、静かで空調のきいた大きな空間と時間を買うために、とてもお値打ちだと思っっているのです。「美術館」のこんな空間が好きな私は、だから、「美術館」友の会の会員なんでしょうね。

ボランティアで会報のデザインをしてくださった都市デザイン研究所の方からは以下のようなコメントをいただきました。

11号からデザイン/レイアウトを担当させていただきました。忙しい時期と重なった時は大変でしたが、毎回どんな内容なのかとても楽しみでした。これからも友の会の方々のご活躍を心より期待しております。

(桑原房子)

桑原さんの他に、小島さん、鈴木さんにも大変お世話になりました。無理な日程で作業をお願いしたり、細かい修正に何度も対応していただいたり、お三方抜きでは『空中回廊』を作り上げる事は不可能でした。長年のご厚意に、編集スタッフ一同心から感謝申し上げます。

スペースの関係でここでは紹介できなかった「ひとこと」もありますが、今後の活動のなかで参考になるものばかりでした。アンケートにご協力くださった皆さん、ありがとうございました。これからも友の会と会報をよろしく願います。

企画展の小・中学生無料化について

「野見山暁治展」と「国吉康雄展」の掲出ポスターに、〈小・中学生無料〉と書いたピンクや青色のステッカーが貼られていたことにお気づきでしたでしょうか？

愛知県美術館では、所蔵作品展の観覧は小中学生無料ということはご存知と思いますが、実は開館した1992年と翌年までは、小中学生からも100円の観覧料を頂いていました。これには色々な事情がありましたが、もともと美術館としては子供達から日常的に親んでもらいたいと願っていました。そして入館者数や入場料収入のデータを積み上げ、メリットとデメリットの比較を説いて条例の一部を改正し、小中学生だけでなく、学校行事として所蔵作品展を観覧される場合は高校生や引率者を含めて無料としたのでした。

次の目標は企画展の小中学生無料化でしたが、昨年秋の予算要求の段階でようやく、今年度の企画展を小中学生無料として算出し査定を通過することができました。この背景には、新しい学習指導要領における「総合的な学習の時間」への支援・協力および学校週五日制への対応、そして他の美術館・博物館での無料化への動きという時代の変化もあります。ただし現段階では条例の改正までには至らず、展覧会ごとに共催の新聞社や放送局などの理解を得ての実施ということになっています。

子供からも収入の見込める展覧会ならば観覧料を徴収すればよいとか、無料化分の負担をどう補償するかという議論もあります。その一方、無料化は教育的側面とは別に、将来の有料観覧者の育成や、保護者の負担減による入館者増につながるという考え方もあります。国吉康雄展では「家族パスポート」を学校やホームページで配布し、小中学生への記念品プレゼントと家族への割引を試みました。「ファミリー割引」はこれまでもありましたが、親が子供をではなく、子供

たちが家族を連れてくることや、美術館が家族みんなの楽しむ場所となることを期待しています。友の会会員の皆様にも、こうした考え方をおひろめ頂きたいと思っております。会員向け特別鑑賞会に託児付きの会を設けていますが、お子さんが就学後はぜひ一緒にご観覧願いたいものです。（企画普及課 深山主任学芸員）

はじめまして

学芸員 森 美樹



4月より、愛知県美術館の学芸員として勤務するようになり早4ヶ月が経とうとしています。毎日がとても新鮮で楽しく仕事をさせていただいています。

名古屋で学生生活を送った私にとって、愛知県美術館は大変親しみのある美術館でした。特に作品に静かに浸ることのできる、独特の空間がとても好きでした。勤めるようになり、そうした心地よい空間が、展覧会企画、作品調査、展示、作品保存など様々な作業を通して生まれることを知りました。これらの作業一つ一つを学芸員自らが行うことで、あたたかな配慮や愛着が感じられる「手作り」の空間となるのだと感じました。

今この美術館の空間で仕事ができることをうれしく思っています。今後も「手作り」であることを大切にしながら、友の会会員の皆様、そしてより多くの方々にとって、美術館がアートとの楽しい出会いの場となるよう励みたいと思います。

私のこの一点

イヴ・クライン《アルマン》

馬場 駿吉 友の会理事・美術評論家

愛知県美術館の所蔵する20世紀美術の名品の一つに、イヴ・クライン（1928-62年）のレリーフ作品《アルマン》（1962年）がある。イヴ・クラインの親友美術家アルマンの裸体から直接、石膏で型取りしたレリーフ像をブロンズ化し、インターナショナル・クライン・ブルー（IKB）と自ら名付けた深い青一色に塗り上げた作品。それが金箔張りのパネルに据え付けられている。

彼は19歳（1947年）の時、ニースの警察署に設けられていた柔道場で、同年輩のアルマンとクロード・パスカルに出会い、3人でしばしば海辺に出て夢にふけた。そんなある時、世界を3つに分割してそれぞれを専有しようと話し合い、クラインは空を選び取るという神話的エピソードを生んだ。クラインの魂まで塗り上げるようになったIKBも空あるいは宇宙を表徴するにふさわしい色彩として、彼が顔料から独自に調製したインディゴ系の暗青色。オブジェの素材に海綿が好んで用いられていたことから、IKBにニースの海の色を重ねてみるのもそんなに不自然とは思えないのだが、大方のクライン研究者はそれを認めていない。しかし、宇宙飛行士ガガーリンの「地球は青かった」という言葉にクラインが反応した気配があることからすれば、IKBには宇宙から見た水の惑星＝地球の青さ、つまり海の青さをも含むものであると考えてもよいのではないか。

この作品の背景となっているパネルの金色もまたクラインにとっては重要な色彩の一つである。傾倒していた薔薇十字会（17世紀の錬金術や魔法につながるとされる謎の多い秘密結社の一つ）の経典によると金色は〈精神〉を表わすという。また、彼は柔道修行のため日本に1年半ばかり（1952年9月-1954年2月）滞在し、講道館から4段位を得たが、その時、金屏風の前に漂う神聖感を体験したに違いない。親友の生きた身体の一瞬を一旦物質化、それをさらに永遠性をたたえた非物質的な存在に変化させる秘法として、クラインにとってユニバーサルな意味を持つこの2色が見事



イヴ・クライン《アルマン》

に使われているのに感嘆せざるを得ない。因みにこの作品は、1962年、クラインが心臓発作で34歳の短い生涯を閉じる寸前に始められた最後のシリーズ「人体レリーフ」のうち、生前に完成した唯一のものであって、その意味でも貴重な一点だ。

このモデルになったアルマンは1980年にしばらく名古屋に滞在し様々な同一既成工具を集積するオブジェを制作したことがあり、その現場に立ち会ったり、長良川の鵜飼いに同行したりして親しく、楽しい時間を共有した思い出が忘れられない。この作品の前に立つと、アルマンを架け橋として、生前に会うことがなかったイヴ・クラインとも対話しているような錯覚にとらわれる。この作品に初めて出会ったのは、1986年1月、当時の西武美術館（東京・池袋）のイヴ・クライン展でのことだった。それが今、身近に観られることを感謝したい。

愛知県美術館 素顔の扉を開く

最終の扉 学芸員の仕事 調査・研究・展覧会企画

これまで「素顔の扉を開く」では、愛知県美術館のさまざまな仕事を紹介してきました。今回は会報アンケートに寄せられた皆さんからの質問をもとに、学芸員の仕事に深く迫る内容のお話を企画普及課長の木本さんから伺いました。

バックヤードツアーに参加し、収蔵品が大切に保管・管理されていることを知りました。通常、学芸員の方は、どんな時に、どのくらいの頻度で収蔵庫を訪れているのですか？

収蔵庫に行く目的は大きく分けて二つあります。ひとつは作品を管理するための施設の確認、もうひとつは作品の実見。作品の実見は、学芸員として日頃の研究の一環としたもの、また、所蔵作品を他の美術館への貸出や返却時といったところですよ。ですからどれ位の頻度といわれても、回数チェックは行っていませんので確かな数値はいえませんが、ほぼ毎日と言ったところでしょうか。

調査・研究の内容や、どのようにされているのかを具体的に教えてください。

調査・研究は、原則20世紀以降の美術を中心に、企画展、あるいは学芸員自身が日頃持っているテーマに基づいて行います。方法としてさまざまなものがあり、文献にあたる方法や作品の実物にあたる方法、あるいは生きている作家もしくは作品に関係のあった人々への聞き取り調査などが主に挙げられます。文献は大学や図書館などに調べに行きます。作品の実物にあたる場合、美術館の収蔵品であれば、「こういう目的で調査に行きたいのだが」というように事前に了承を得た後で協力していただいています。これが個人の所蔵作品となると少し難しくなって、日頃から積み上げてきた信用や実績がより物を言うようになりますが、何よりもこのような研究がしたいという熱意をどう伝えるかが大切なことですよ。

企画展で他の美術館などから借りた作品を調査したい場合はどのようにするのですか？

国内外の美術館から拝借してきた作品は、作品点検と展示して見せるという行為しか基本的にはできません。

しかし、作品点検以外の目的で、つまり研究のため、どうしても裏蓋を開けて調査したいとか、作品を実際に額から外して見たいという場合は、事前にその目的を伝え、所蔵者の了解を取った上で行うことはあります。

調査で心がけていることや、苦労話があればお聞かせ下さい。

調査で心がけることは極力客観的な視点で冷静にものを見ること、これが重要です。入れ込んでくると、どうしても全てを一つの視点で見ってしまうという危険性があるからです。そもそもはそれだけ入れ込まないと良い展覧会と研究はできないとも言えるのですが、これも恋愛と同じでして（笑）、惚れてしまうものがトータルに見えにくくなるというケースです。もう一つ、目的意識も大切です。調査を行う目的は何か、対象としているものは何か、ということをお初めにしっかりと認識していないと、状況に流されかねません。作品をもつ所蔵家は、われわれ以上に特定の作家の熱狂的なファンであることが多いのです。そんな彼らのところへ行って調査をする場合、相手の熱情に負かされてしまい、どんな作品もすばらしいということになりかねません。そんな時には長年の経験と実績から、ここまではいい、ここまでは駄目という客観的なものの見方を、たえずベースに持っていないと危険なことになります。また古い作品になると真贋の問題があって、実際に困惑した場合があります。これは私の体験ですが、ある所蔵家のところへ作品を3点借りに行ったところ、「いつも貸し出すのはこの3点ばかりだが、私はいっぱい持っているのだからたまには違う作品を選んでくれ」と言われました。20点ぐらい作品を出されて「この中から選べ」と。しかし実はその所蔵家は初めて会った学芸員の品定めをするということまで有名な人で、選択させる作品のなかに、わざと半分ぐらい偽物を混ぜるのです。それで学芸員の目を試すためなのでしょうが、その時はたまたま事前の調査で、確実にその作家の作品だと認められているもののデータをインプットしておいたので、幸い該当する作品を選ぶことができました。緊張しますね、そういう場面では。

学芸員の方は「お宝鑑定団」に出てくる鑑定士のよう
なこともできなくてはいけないということですか？

確かに美術館で仕事をしていると、一般に知られているテレビに出てくるような鑑定士の人達と同じだと思われることもあります。しかし学術的な研究を生業とする学芸員と市場に直結し価格まで設定する鑑定士とはまったく異なる職種です。先程のような真贋を見極めなければならないようなケースにあたった場合とか、美術館のコレクションとして収集する場合などパーフェクトな回答が要求されます。この時、学芸員が全ての作品に対して鑑定ができるかどうかという点については、それぞれの専門分野があり、非常に難しい問題があります。その場合は、各分野の専門家からの助言を受けて判断します。それと美術館、特に国公立の美術館の学芸員は基本的には個人の利益につながるような真贋の鑑定はしないことになっています。というのは昔、本物偽物ということをやったがために、最終的に責任をとったという事件があったからです。それがきっかけのひとつとなって、今では国公立の美術館では個人の利益につながるような鑑定を一切行っていません。

企画展について、どのようなものを計画されて、いつ頃から進められているのですか。今後の予定は？

企画展の場合、これもなかなか難しい問題ですね。例えばピカソ展をやりたいとしても、海外で同じ時期に同じような企画展を企画されていたら主要な作品を借りることが難しくなって実現できませんよね。また借りたいと思っていた重要な作品が、違う展覧会に出展された後の1年間のお休み中だったということもあります。また、昨今のような財政状況が好ましくないなかにあっては、なおさら具体的に、何年先に何々展をやりたいという計画はたてにくいものです。

企画展開催の理想的な形は、研究を積み重ね、その結果として企画展の実現というのが一番です。そのため学芸員は日頃の事前調査の段階から、なるべく多くの作品に接し、従来の情報との違いはないかチェックし最新の情報を蓄積する心がけが必要です。さて、いつ頃から企

画展の準備に入るかということですが、一般的には大規模な企画展だと大体5年位前から計画をたてます。例えば開館10周年の時のミロ展にしても5年程前から担当学芸員の村上さんが作品にあたるため海外に何度も足を運んで、地道に一つ一つ積み上げて作り上げた展覧会でした。美術館の企画展の本来的な姿というのはそうあるべきだと思います。

また企画展のテーマとして、愛知県美術館では20世紀以降の美術を主に取り扱っていますが、必ずしもそうではないこともあって、例えばポンペイ展をやったり、イタリアルネッサンスをやったり、昨年の空海と高野山展もそうですね。美術というのは、時代で輪切りができるものではありません。美術のベースは人間の歴史みたいなもので脈々とつながっているわけなので、時代設定といっても難しいのです。そのため、愛知県美術館でもテーマにとらわれず、みなさんの希望をできるだけ満たし、またわれわれも勉強になるような企画展を考えています。もちろん企画展というのはタイミングの良さというものもありますから、「空海と高野山展が良かったからもう一回やってくれ」と言われましても、そうはできませんよね。あれは高野山の全面的な協力があって出来たことであって、数点が貸し出されることはあっても国宝、重文を含めた100点以上が一度に出るようなことはたぶん2度とないでしょう。

さて今後の企画展ですが、現在公表できるのは愛知万博協賛事業の「自然をめぐる千年の旅 山水から風景へ」「アジアの感性」「ゴッホ展」の3本の企画展です。この後は、予算折衝段階ですので控えさせていただきますが、戦後の前衛作家の回顧や郷土の美術にかかわる内容の展覧会などを検討しています。

以上ほんの一部しか紹介できませんでしたが、お忙しい中、快くご協力くださった木本課長のおかげで、非常に興味深いお話が伺えました。本当にどうもありがとうございました。

(湯田)



事務局から

美術館サポート事業開始のご報告

平成16年度から始まった美術館サポート事業は、友の会が美術館にお世話になるばかりでなく、愛知県美術館愛好者集団として何か出来る事があるのではとの視点から、美術館と友の会との協議の中で生まれました。

既に近隣の名古屋市美術館、三重県立美術館、岐阜県美術館、静岡県立美術館では美術館ボランティアが盛んに行われています。友の会会員のなかにもこれらの美術館でボランティアをされている方もあり、愛知県美術館の一番の鑑賞者の集まりである友の会が美術館をサポートする事業展開は、社会的にも自然な流れでした。これまでの友の会の支援活動は、展覧会の広報など外に向けてのものでしたが、これからは直接美術館業務の補助的な部分でも支援活動をはじめることになりました。作業の場所など美術館側の準備が整ったことから、初めての活動を7月15日に行うことができました。

事務局日より22・23号で報告をしましたが、まだ走りだしたばかりです。愛知県美術館友の会の美術館サポートをより充実した内容にして



作品保存用備品の製作

いくためにも、一人でも多くの方のご参加をお待ちしています。少しでも興味のある方はぜひ一度見学にいらしてください。近い将来は友の会のコーナーを美術館の中に設置し、会員が気軽に参加できるようにしたいと考えています。

表紙の作品は、グスタフ・クリムト《人生は戦いなり(黄金の騎士)》(1903年 油彩)。友の会が行ったアンケートで、愛知県美術館所蔵作品ベスト10の第1位に選ばれた。

編集スタッフから

「鼎談」では宮崎会長に『夢物語』を語っていただきましたが、私はこの記事をもとめていて本当に『夢』を見てしまいました。美術館友の会が存在意義を認められ、愛知県の条例で友の会を設置したという夢です。そこで私は、友の会の代表として条文を考えていました。この夢、10年後には正夢になっているかも…。 (森)

友の会発足当時から活動のひとつであるこの『空中回廊』も、多くの方の手を経て現在の編集スタッフに引き継がれ、今回10周年記念号として皆さんにお届けすることができました。変形・倍増ページとなり、編集会議もいつも以上に回を重ね格闘しましたが、楽しんで頂けたでしょうか。次の20号より内容・デザインを一新する予定です。よりよい会報となるようご意見ご感想をお寄せください。 (水野)

今回は、市川館長・木本企画普及課長・宮崎会長に鼎談の場を持って頂き、「私のこの一点」を馬場さんに、「会員のたより」を大野さん・小島さんに寄稿して頂きました。その他、10周年記念として多くの方に「所蔵作品ベスト10」「会員のたより」「素顔の扉を開く」「川柳」に参加して頂きました。また「熊谷守一展」を古田主任学芸員に、「素顔の扉を開く」を木本企画普及課長にお伺いし、「所蔵作品ベスト10」コメントを村田美術課長に、「美術館のページ」を深山主任学芸員・森学芸員に寄稿して頂きました。ご協力ありがとうございました。

編集 □ 水野 愛子 / 真野 良子 / 森 健次 / 伊奈 由希子
湯田 文 / 平松 章子 / 折戸 祥子 / 中田 賢
協力 □ 愛知県美術館企画普及課

発行 □ 2004年9月
愛知県美術館友の会
〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2
愛知芸術文化センター内
Tel 052-971-5511 (代表) 内線347
Fax 052-971-5604
E-mail: tomonokai@aac.pref.aichi.jp
美術館ホームページ:
<http://www-art.aac.pref.aichi.jp/>

デザイン / レイアウト □ 小島 篤 / 桑原 房子
□ □ □ 伊奈 由希子